

# 論壇時評

中嶋嶺雄

10・13ロッキード判決をめぐって、各誌が田中角栄論なしに、大胆な刑事被告人が出現し、は当分の日本の政治分析に大きくくさしを削いでいる。「中央公論」、「文芸春秋」、「正論」、「経済往来」、「現代」などがいずれも特筆を注いでいるなかで、D・J「Voice」のみが田中裁判や当分の日本政治について触れている。「この難題らしい個性をどう見よう。」

「大胆不敵な刑事被告人」と立花氏と、ロッキード判決では「田中角栄と私の9年間」(文芸春秋)を語っている立花隆の感想をまず求めるべきであろう。立花は、判決直後に「なぜ最高刑でなかったのか」(朝日ジャーナル・十月二十一日号)で、求刑よりも一年延び今回の判決について「九段(きゅうだん)の功を二倍(にばい)の功にかけた判決」と批評している。田中金脈を暴いた「ヒーロー」ナリスムの旗手となり、ロッキード裁判を執拗に傍聴しつづけた立花によれば、被告人・田中が「七年間」にわたって「巨大な政治力」を以て裁判をひっくり返して「手錠を」つ、あまりにも大仕掛けである。

## 民主主義の退廃劇と説く

▲西部邁「退屈なるかな角栄劇」

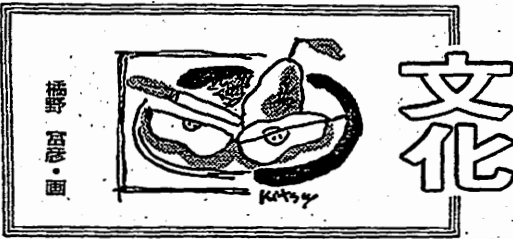
藤原弘達「角栄もういかりげんにせんかい」

### 世論の代弁者としての意見

「このよきな」大胆不敵な刑事被告人の出現ゆえに、田中金脈政治批判という点でマス・メディアの果たしている役割は大きい。しかし、田中問題の根深さを、大仰で情緒的な論陣に巧みで切開きつづけるは思えない。田中判決についての多数論議のなかで、「この点を指摘したのは西部邁の小論「退屈なるかな角栄劇」(エッセイ・十月二十五日号)であった。多くの論調のなかで稀有な鋭い逆説

今日の日本型大衆社会は、田中角栄によって「代表される」と見做してきた西部は、今回の新聞「雑感」で、この田中指弾を「その本質においてリンチである」といっている。この指弾は「かなり」角栄劇によって「リマタ」されてきているのは、思想としての主権在民と擬議としての代議民主主義である「のだから、それは民主主義の退廃劇的なものである。西部の逆説は、この「よきな」方は、小筆畫像が今月は「いかに」描き出している。心の中は立ち上り、角栄を切つていこうという真憤がこもっている。大衆誌をさるものであれば稀有のものであった。

「おて」母さ下つたと思われ、右の文章で、言末陰明から始まって師の丸山眞男までを引きながら、「角栄死闘」の政治的風骨を得意のタッチで描いている。藤原の今回の文章は同じ田中批判でも立花のそれとは違って、戦中・戦後をカムフラに



「かげんにせんかい」(文芸春秋)である。藤原は、意外にも「文芸春秋」誌上の十五年ぶりの登場とあって、久々に力を「おて」母さ下つたと思われ、右の文章で、言末陰明から始まって師の丸山眞男までを引きながら、「角栄死闘」の政治的風骨を得意のタッチで描いている。藤原の今回の文章は同じ田中批判でも立花のそれとは違って、戦中・戦後をカムフラに

「巧妙な政治批評」な、今日の日本の政治を考

「石橋自身の感情的な変身を感じ、させ、河上民雄・高沢真男の

「日本社会党・反骨と主張」

「日本家庭の空間」

「俳句の生まれる場所」

「草間時」

「美術展」

- ★小沢まゆみ展 銀座6ノ3
- ★チャリセンター内大阪フナ
- ★ルム画廊(20日)
- ★ホワノ・ミロ展 銀座6ノ
- ★東京銀座アートセンターホ
- ★(20日)
- ★銀座下宿画廊「リンドル紀
- ★銀下3ノ3ナル画廊
- ★銀座3ノ4新妻29日
- ★森田昌之展 銀座2ノ5ル
- ★(20日)
- ★南井眞子油絵展 銀座3ノ
- ★4もて画廊(20日)
- ★第23回青輪会展 上野都美
- ★術館(30日)
- ★家永隆画展 日本橋本町4
- ★9第2期野野口ル内真木画廊